

第1回仙台市文化芸術推進基本計画検討懇話会 主なご意見

仙台市の文化芸術面の強み・特徴

- ①『新観光立国論』の著者であるデービット・アトキンソン氏によれば、訪れてもらうための4つの条件は、自然、気候、文化、食に恵まれているということ。仙台は、みどり豊かな気候風土があり、三陸の漁場を抱え、さらにきれいな水が豊富で米、酒がつかれる。そして適当に都会で適当に田舎であり、海も山も近い。そして政令指定都市の中でも、夏と冬の寒暖差が一番小さく住みやすい。東京にも近く（東北の中では）人口が多い。地理的な優位性や、マーケット的にも、支店経済でこれだけのフランチャイズを抱えているという優位性がある。まちにも活気があって、1年を通してこれだけ市民によるお祭りが行われている都市は他にありののだろうかと思う。さらに、音楽イベントやプロスポーツも盛ん。つまり、まちづくりの柱となるコンテンツがたくさんあり、恵まれた環境にあるということをお忘れはいけないと思う。
- ②仙台市では楽都、それから劇都として、メディアテークもフラッグシップとなって様々な事業を展開している。
- ③仙台市は、市民主体の活動が非常に多いという言葉や調査結果が出ていた点が、大きな特徴かと思う。
- ④様々な活動の中で必要なのは、「する」「みる」「支える」。ボランティアの方々がスポーツや文化に限らずたくさん育ち、そうした財産が築かれているということは非常に大きなことではないか。
- ⑤震災の後のような、無音の時期というのを、コロナ禍で全国、全世界の人がそれを体験することになるのだが、11年も前に仙台ではBGMを含めて何も音のない世界に、生きることだけに特化しなければならない現場になったが、震災から2週間もしないうちに、ホールが全部壊れている中でも、街中で歌声が聞こえ、仙台フィルのメンバーが演奏を始めた。このような場面を通じて、単にオーケストラや、国際音楽コンクールなどがあるから楽都なのではなく、生活の中に音楽文化というものを、心の糧として持っていたいというような意識が、楽都のコンテンツの中の重要なファクターなのではないかと、この10年間に感じる場面がたくさんあった。
- ⑥自治体が広い視点を持って、1つ1つの事業の中に様々な視点や参画の場を持っているのが仙台市の特徴と思っている。例えば、仙台クラシックフェスティバルでは障害者を含めたコンサートの企画制作がなされている。また、仙台国際音楽コンクールでは、出場者がさらに大きな世界的コンクールに入賞することにより、仙台という場所の名前を全世界の人々が知ることにつながっている。昨年のコンクールでは、ロシアの戦争の問題があったが、仙台のコンクールはロシアの参加者も受け入れて、芸術文化の中に垣根なしという姿勢を持ったことに対して、世界から評価をされることにつながったと実感している。
- ⑦仙台市の文化財の特徴はその数が圧倒的に宮城県の中では多いという点。仙台市は西は奥羽山脈の麓から東は太平洋まで非常に地理的にも変化が富んでいる。その間にある仙台平野に

は、飛鳥奈良時代に古代の陸奥国の国府があった。江戸時代には仙台城があり、城下町が仙台の中心となった。こうした歴史的にも地理的にも深い環境があることがその数の多さの理由である。

- ⑧ ブランドと言えば伊達政宗公。日本遺産に「政宗が育んだ“伊達”な文化」ということで登録をされている。国づくり、まちづくりという観点や文化の継承をしていくということでは、現在まで脈々と受け継がれ、DNAが息づいてるような感じがする。
- ⑨ 仙台は東北の中で一番大きな都市で、マーケットとしてのポテンシャルや、文化芸術に関するニーズというのは、非常に高いものがあるだろうと思う。
- ⑩ アンケートで今後どのようなことに力を入れていくべきか、というところで回答率の高かった、質の高い作品、著名なアーティストの公演や作品の鑑賞機会の創出についていうと、展覧会を開催するとき、大型催事は全国を巡回するが、仙台が選ばれる可能性は非常に高い。その理由はファンリティがしっかりしている仙台市博物館や宮城県美術館、東北歴史博物館のように受け入れる施設があること、また仙台で開催すると成功するというような、マーケットとしての需要が相当あるためだと思っている。

計画の範囲・考え方

- ① 現在計画はないにしても、様々な活動が立ち上がっていて、それに対応するような取り組みや、政策といったものがこれだけあるということが確認できた。今回、計画としてまとめる際の観点として、ほぼ全体が網羅される必要もあるかと思う。
- ② コロナ禍を経て、心身の回復に文化芸術の力の影響を体験的に感じており、市民一人一人の生活の中に文化政策の影響を感じている。
- ③ 東日本大震災を経験した上で、災害文化、伝承の文化の取り組みの位置付けや定義付けが、どのように表現されていくのか気になるところ。
- ④ 私たちが体験した大震災を通じて生まれてきていること、すなわち「災害文化」というキーワードの中に、障害のある人たちも含む市民の多様な知恵や実践があるということが、計画や実践、活動に結び付くことができるとよいのではないか。
- ⑤ 市民主体で参加する芸術活動というのは、いわゆる作品を作るだけではなくて、メディアワークの活動でアーティストの藤浩志さんが行っている部活のような場を作ることも、今は文化活動の参加と考えるのではないか。そういった視点で文化活動を改めてとらえ直すと、この計画で「参加」ということの意味や、力点を置くべきものは変わってくるのではないか。
- ⑥ 作品づくりをすること自体が参加なのではなく、自分の思っていること、関心のあることなどを他の人と共有できる形に表現をするというようなことを、文化や芸術ととらえると、商品として作品がたくさん流通したり、モノとして保存されたりすることとはまた別に、人の学びと結びついたり、もう少し広い領域と関わっていく文化のあり方があるのではないか。
- ⑥ 昨今、障害のある人たちという像が、多様な障害への配慮ということに大きく拡大されてきている。例えば身体障害や知的障害に限らず、社会に出た青年期以降でコミュニケーションや認知の問題から、離職や生活困窮に至ってしまうというような、少し複雑な障害を抱えた手帳を持った障害者ではない方が現状、社会の中に増えている。その方たちへの支援をするというのが、法律や、全国の障害者芸術文化活動支援センターの活動の中で力点になっている点である。

新たな文化施設((仮称)国際センター駅北地区複合施設)

- ①音楽ホールについては、非常に大きな、将来に向けて大きな負担もかかってくるものであり、一方その潜在力を生かせば仙台市の様々な施策が有機的に連携して、まちのブランディングや顔にもなりうるというものであり、これをどう展開し、既存のものといかに結び付けていくのかということも必要。
- ②新しいホールについては、まちの顔になって欲しい。例えば、台湾ではこの数年、(世界でも有名な建築家や事務所の) OMA や伊東豊雄や Mecanoo が設計したインパクトのあるパフォーミングアーツセンターが複数オープンしているが、その建築を通して、都市のアイデンティティを積極的に魅せようという意欲をすごく感じている。
- ③ホールは、公演がない日は完全に締め切って、公演があるときだけ開いているという従来型ではなく、最近の建築の試みとして他市の例にもあるような、公演が行われていない日でも人の居場所があり、その建物が身近に感じられるような開かれたホワイエなどの空間づくりだったり、また空間や眺めを楽しめたりするような施設となれば、より市民に親しまれるのではないかと思う。今回メモリアルも複合的に入っているということで、普通のホールとは違う性格になるので、そういう意味では必然的に個性を持つと思うので、期待している。
- ④2,000席のホールの構想があるが、良き聴衆がいなければ文化芸術は育たない。聴衆をどう育てていくのか、興味関心を持ってもらうことに加え、購買意欲も含め、飽きさせずに、今行われている事業とともにどのように継続維持していくのかを考える必要がある。

計画の推進体制

- ①事業については、関係部署が企画の段階から連携をして取り組んでいるが、情報共有については、現状において十分な連携は図られておらず、それぞれの担当課からの情報発信にとどまるという現状にある。仙台市の文化政策という総合的な政策として、今後計画というかたちで打ち出していく場合に、そのあたりもポイントになるのではないか。
- ②組織体制の問題、縦割りの部分に横串をどうするかということは意識改革では難しく、体系的に連携していくような仕組みづくりが必要なのではないかと思う。
- ③5年の計画だが、コロナのことを考えて5年前に比べて現在を俯瞰すると、激変している。だから計画も固定的なものではなくて、PDCA サイクルを回しながら見直しができるような仕組みを組み込むといった、柔軟性を持たせた計画とした方がよいのではないか。

計画策定にあたっての視点

(1)全体

- ①これまでの施策を体系的に整理し、文化芸術が持つ多様な力をまちづくりに活かすための本市の文化振興の新たな方向性を示す、というのがこの基本計画の目的。スタートラインであり、これまでの施策を体系的に取り込みながら、発展的に、新しいものを付け加えていくというようなものであろうと思う。
- ②往々にしてこういう計画というのは、画餅になりがちで、作って終わりとなることがあるが、これは作ってからの始まりと位置付けたいと思っている。
- ③今回の文化芸術推進基本計画というのは、これまで個別に行ってきた各施策をいかにして

統合していくのかというところ。各施策を行ってきた担当課が複数に分かれているところが、協力をして、一本の大筋をつくり出していく。そして、いくつかの支流をつくり出していくという、ツリー構造のような形で、総合的な基本計画をつくり上げるのかなと思う。

- ④ 個別の施策、それぞれの担当セクション、これをいかに統合してシナジー効果を持たせながら一貫した政策として打ち出していけるのかが一つ大きな肝になる部分。
- ⑤ 基本計画が作られることによってお互いに目を覚まして、結びつきが起こるといふ、そして新たなエネルギーが生み出される、というような基本計画であって欲しい。
- ⑥ 今回策定する計画が「基本計画」であるということは非常に大事。1個1個の施策というよりも、横断的に見た時に、仙台市が基本計画として文化芸術において何に力点を置くのか、また最終的に計画として言葉に落とし込むときに、言葉の定義やそこに委ねるものを明確にしていく必要があると思う。
- ⑦ 気になった重要な点としては、文化の範囲がやはり拡大していること。例えば災害文化、これをどのように位置付けるのか。それから市民主体の表現活動、従来の文化芸術の中に入ってこなかったようなものをどのように考えるのか。また障害者の方々、色々な意味で健常者との境が分からなくなっている中、この実態を踏まえて改めて考え直す必要もある。また文化観光の話も出たが、食文化はどうなんだろう、などと色々な範囲をどのようにするかということを考えていく必要がある状況だと思った。
- ⑧ 21世紀になり、ものすごく大きく世の中の形が変わり、政府のありようが大きく変わった。政府は政府でしかできないことに集中し、民間ができることは、できるだけ民間の方々が知恵と工夫を凝らしながらやってもらえるような条件整備をする、というところに焦点が当たってきている。社会的な条件整備は政府以外ではなかなかできず、時にはお金を出すことよりも重要なときがある。条件整備について、官民協働でどういうところが最適なのかということ、これからのご議論の中で深めていただきたい。
- ⑨ (法には)「国の計画を参酌しながら」とありながら、同時に「地域の実情に即したものを」と明記されており、個人的にはこの部分が大切だと思う。この計画には、仙台市民が必要不可欠と考えるものをできるだけ盛り込んでいければと思う。
- ⑩ 「仙台市文化芸術に関する意識調査」は非常に重要な資料なのではないかと思う。このアンケート調査の結果も踏まえ、市民の方にどれだけ沿った内容の計画を立てられるかということが重要なのではないか。

(2) 予算化

- ① お金はすごく重要で、ぜひ文化のための予算を取っていただきたい。計画を作ることで予算獲得の裏付けになるかもしれない、そこが私たちの役割の1つでもあると思っている。
- ② 障害のある方の文化芸術活動の支援のために必要な負担については民間も頑張るが、行政の方でも一定の予算枠を付けるなどの具体的な計画が必要。また、障害者の問題だから福祉課の仕事ということではなく、教育や観光を担うセクションにも、学びや予算化が必要なのではないか。

(3)見せ方・戦略

- ①仙台の実力を再認識し、改めて正確に把握し、そのプロデュースをどうするかやブランドをどうするか、トータル的に見せるにはどうするかという視点が必要。
- ②仙台市には全国的に認知されている様々な文化的イベントがあるが、個別に認知されていると思う。仙台市の文化政策の中で、個々のイベントが、仙台市の文化力を示すような形でこれからどのように示していけるかを考えていくことが重要なのではないか。総合的な文化力として発信していくにはどうしたらいいかを意識的に考えていく必要がある。
- ③単なるイベントだけではなく、一次効果、二次効果、三次効果を生むような、例えばイベントプラス観光をどうするか、といった仙台市のトータル的な戦略が必要だと思う。これだけ観光人口や関係人口が増えるチャンスがあるのであれば、横糸を編み込むことで、経済効果をさらに上げていくことができるのではないか。

(4)アクセス・障害のある方の文化芸術活動

- ①文化芸術へのアクセスについて、今、アクセスを考えるときには、今まで参加していなかった人たちのアクセスをどう考えるか、という視点が必要ではないか。今のアクセスの考え方で問いかけた答えと違うニーズがあるのではないか。
- ②文化芸術の多様なジャンルに障害のある人が参加していくことが必要。仙台市の文化政策の中においても、障害のある人たちの持っているポジティブな力、その多様な表現者としての領域、参画、鑑賞していく裾野を拡大していく中での障害のある人の芸術環境の醸成というところについて、もう少し視野を広げていくような計画、実効性のある計画があると良いと常々感じている。
- ③現代社会の中の障害者への配慮や支援を考えると、新しい提案があるだろうと思う。今を生きている障害のある方たちに対してアプローチをする文化芸術活動というのが必要なのではないか。
- ④現在、文化庁と共に、「ミュージアム・アクセス」ということをキーワードに、文化施設における障害のある人を含む多様な市民への支援を行っている。国の調査によると、文化施設側で、障害のある人等の市民がプログラムに参加するための準備をしていると答えた割合はまだ20数パーセントにとどまっているのが現状。仙台市の多様なミュージアムや文化施設、社会教育施設等が、見えない、聞こえない、あるいは発達障害や知的障害のある人たちのために、情報を届けたり、普段行っているギャラリートークの中に様々なコミュニケーションの支援を入れたりすることが必要。

(5)人材・その他

- ①震災後、人が生きるという時に芸術文化がどんな可能性を持つかという問いを持った人たちが、UターンやIターンをしてきたものの、この土地で仕事を得ることが難しく、去ってしまった人々をたくさん見ている。地域の文化芸術における経済活動のバランスもあるのではないかと感じている。人々のネットワークや信頼、未来に向けた投資というのは、アーティストあるいはNPOという領域の人たちが大切に行っている仕事だと思う。NPOも含めた文化芸術関係者が、この土地の中で仕事をしたり、活動を持続させていけるような、そうした計画が作られることを期待している。

- ②鑑賞するという観点のみならず、活動・表現をする側やその支え手の育成の充実や環境整備についての観点も必要ではないか。
- ③次にプレーヤーになっていく人たちの関わりを作っていく場をどう作るのかということが、今これだけ盛んに文化活動が行われている仙台だからこそ、文化活動全般にとって必要なものとして考えられるのではないか。
- ④仙台が持っている魅力を発信するという意味で、東北、全国、海外という広い視野を入れていく、という点も必要。
- ⑤東北の中で、仙台は大きな都市で、仙台で何かを行うといった時には仙台市に住んでいる人だけではなくて、東北全域の人が関わってくるものでもあると思う。例えば県内の自治体との連携や、政令市としての都市間での連携を仕組みとして考えられるのかを、基本計画だからこそ考えてみてはどうか。